St. Luke's International University Repository

Summary of curriculum comprehensive evaluation from 2000 to 2004 Part 3: Evaluation on the clinical practice.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長江, 弘子, 及川, 郁子, 菱沼, 典子, 射場, 典子, 亀井, 智子, 有森, 直子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/494

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

報　告

2000年度から2004年度カリキュラム総括評価
－その３　実習科目評価について－

長江　弘子[1)]　及川　郁子[2)]　菱沼　典子[3)]
射場　典子[4)]　亀井　智子[5)]　有森　直子[6)]
(聖路加看護大学2005年度カリキュラム検討委員会)

Summary of Curriculum Comprehensive Evaluation from 2000 to 2004
Part 3：Evaluation on the Clinical Practice

Hiroko NAGAE, R.N., M.N.[1)]　Ikuko OIKAWA, R.N., M.N.[2)]　Michiko HISHINUMA, R.N., M.S.[3)]
Noriko IBA, R.N., M.N.[4)]　Tomoko KAMEI, R.N., Ph.D.[5)]　Naoko ARIMORI, R.N., D.N.Sc.[6)]
(St. Luke's College of Nursing Curriculum Examination Committee of 2005)

[Abstract]

General evaluations of the curriculum at St. Luke's College of Nursing are conducted every four years. As part of this process, this report summarizes evaluations that were conducted on the clinical practice. Evaluations were given by three different groups: students, faculty members and staff members of institutions at which the clinical practice was conducted. Although the number of responses collected was relatively low (less than 40%), level of satisfaction towards the curriculum was high, the evaluations were generally favorable, and learning effectively by accumulating clinical practice was found. Fourth year students in particular showed the highest level of satisfaction (9.11) in that year and other evaluations were also well balanced. Evaluations from institutions indicated that the contents and methods were beneficial to student learning. However students' preparations for clinical practice received low evaluations. As a result, it was suggested that 1. There was a need to improve preparations for clinical practice at the school and 2. There was a need to think of how to increase the response rate. In the future, we hope to examine the subjects on clinical practice that are the fundamentals of nursing competence, improving these points above and collaborating with student, faculty and institutions.

[Key words] curriculum evaluation, clinical practice, students, faculty, institutions
[キーワーズ] カリキュラム評価，実習評価，学生，教員，受け入れ実習機関

[抄　録]

本学では４年ごとにカリキュラム総括評価を実施しているが，その一部として実習科目評価を報告する。実習科目評価は学生，教員，受け入れ実習機関のスタッフ３者による評価を実施した。その結果，回収率は４割以下で低いが，学生，教員ともに満足度が高く，おむね良好な評価結果であり，実習の積み重ねによる学習効果が見られた。特に４年次に実施する総合実習は，学生の満足度が最も高く9.11を示し，他の項目の評価結果

1）聖路加看護大学　地域看護学　St. Luke's College of Nursing, Community Health Nursing
2）聖路加看護大学　小児看護学　St. Luke's College of Nursing, Child Nursing
3）聖路加看護大学　基礎看護学　St. Luke's College of Nursing, Fundamentals of Nursing
4）聖路加看護大学　成人看護学　St. Luke's College of Nursing, Adult Nursing
5）聖路加看護大学　老年看護学　St. Luke's College of Nursing, Gerontological Nursing
6）聖路加看護大学　母性看護学　St. Luke's College of Nursing, Maternal Infant Nursing & Midwifery

2006年１月６日　受理

と比較してもバランスのよい評価結果であった。実習受け入れ機関の評価は「学生の学びを得られる実習内容や方法」について評価は高かった。しかし，「学内での学習準備」の評価は低かった。よって，①学生の実習準備学習の強化の必要性，②回収率を上げるような評価方法の改善が示唆された。今後も改善を加えながら，実習と専門科目とのつながりを検討し，学生，教員，実習受け入れ機関が協働しながら，看護実践能力の基盤を形成する実習科目のあり方を検討する必要がある。

Ⅰ．はじめに

本学の現行カリキュラムは1995年度より開始され，本年度は開始10年後の統括評価に当たる年度である。本稿は2000年度から2004年度までの４年間の実習科目に関する評価結果について，2005年９月の統括評価会（FD 研修会）で検討された内容を踏まえ，今後の方向性についてカリキュラム検討委員会より報告するものである。

Ⅱ．これまでの実習科目に関する検討経緯

現行のカリキュラムに関する検討は，開始４年間にわたり毎学期ごとに検討され，そのまとめとして前期統括評価会が2001年９月に実施された。その結果，2001年度12月の FD 研修会において，2003年度よりカリキュラムの一部変更が合意事項として成立した。そのうち実習科目については，①看護援助論Ⅳの開講時期を早めること，②臨地実習はGを含め，３年後期に実施する，③総合実習は４年前期に終了する，④実習時期の変更に伴い，科目の順序性を考慮する，という４点が合意された。これを受けて，2002年３月から５月にかけて実習担当者による検討会が５回実施された。その結果，内容が審議され，カリキュラム運用委員会で最終的な2003年度からの運用が決定され，2004年度には，実習領域別の実習目標とレベル目標との整合，および領域間の均衡化を図るため，実習全体のレベル目標の検討が行われた。

2005年度現在，改正カリキュラムの最終年度までは，順次変更を加えながら評価を継続しているが，2003年度生が４学年終了する2006年度に完成年度を迎えることとなる。

なお，本学では，実習レベルをⅠからⅢの３段階となっており，実習レベルⅠの看護援助論Ⅳはいわゆる基礎看護実習であり，実習レベルⅡの臨地実習Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄ，Ｅ，Ｆ，Ｇはそれぞれ小児看護実習，母性看護実習，成人看護実習（慢性期），成人看護実習（急性期），老年看護実習，精神看護実習，地域看護実習である。実習レベルⅢの総合実習は，４年次に行い学生が主体的に各領域を選択する統合的な実習である。総合実習の領域は，看護提供システム，基礎看護，看護教育，小児看護，家族発達看護，急性期看護，ターミナルケア，老年看護，精神看護，地域看護（国際看護を含む）10領域がある。

Ⅲ．実習科目の評価方法

１．評価者及び評価時期と回収方法

評価者は学生，教員，実習受け入れ機関スタッフの３者である。評価時期は看護援助論Ⅳ（レベルⅠ実習），臨地実習Ａ～Ｇ（レベルⅡ実習），総合実習（レベルⅢ実習）の終了後，学生及び実習受け入れ機関に調査票を配布し回答を依頼した。回収方法については，学生は教務窓口にある回収箱に各自投函することとし，実習受け入れ機関の評価は郵送または実習指導者に依頼し留め置き回収した。

２．評価項目（表１）

実習科目評価は，学生，教員，受け入れ機関のスタッフの３者間で評価を実施した。項目は学生と教員でおおむね一致するように設定した。評価内容は，①実習目標の明確性，②学習内容の統合性，③目標内容の学習，④実習環境・受け入れ体制，⑤教員の指導・援助，⑥他職種の指導，⑦実習課題の適切性，⑧実習の満足度である。

実習受け入れ機関のスタッフによる評価は，①実習目標の明確性，②担当教員との話し合い，③教員との協働，④実習時間帯の考慮，⑤学びが得られる実習内容，⑥学びが得られる実習方法，⑦学生の学内の準備，⑧学生とのコミュニケーションの８項目である。

項目の得点方法は，学生の実習満足度は「全く満足しなかった」から「大いに満足した」までの10点法である。その他の項目は，「全くそう思わない」から「大いにそう思う」までの４点法で得点の高いほうが高い評価になるように，否定的な質問項目は反転させ積算した。

３．評価結果の算出方法

評価結果を単純集計の後，回収率**（表５）**及び平均値と標準偏差を算出した。経年的に評価結果を示すために評価項目と年度をクロス集計した。本稿では，紙面の都合で年度平均値のみ評価項目別に**表２～４**に示し，科目の満足度については，学生は10段階評価，教員は４段階評価し，それぞれ**表２**，**表３**に示した。実習科目は年度平均値でグラフ化し，実習レベル及び評価者別に年度推移を示した**（図１～５）**。臨地実習の学生の評価のみ実習領域別にも集計した**（図２）**。

表１　実習科目評価項目の対比

	学　　生	教　　員	受け入れ機関のスタッフ
1	この実習の学習目標はわかりやすく示されていた	この実習の学習目標は実習レベルに対応して適切であった	この科目の実習目標はわかりやすく示されていた
2	今まで学んだ内容を統合しながら学習できた	この実習の学習目標を学生は理解できていた	担当教員と実習に関して自由に話し合うことができた
3	この実習で目標としていることを学ぶことができた	今まで学んだ内容を統合できるような内容だった	学生の臨床での学習経験に関して教員と協働することができた
4	実習場所の環境や受け入れ体制はよかった	この実習で目標としている内容を学生は学ぶことができた	実習時間帯は，臨床の場の動きを考慮したものであった
5	教員から適切な指導・援助を受けることができた	教員は学生に適切な指導・援助ができた	臨床の場での学びが得られるような実習内容だった
6	必要なときには看護職者や他職種から指導を受けることができた	実習場所の環境や受け入れ体制を整えられた	臨床の場での学びが得られるような実習方法・指導であった
7	実習での課題は実習目標を達成するために役立った	看護職者や他職種から学生が効果的に指導・援助を受けられるよう調整できた	学生の学内での準備がもっと必要であった（反転項目）
8	この科目に対する満足度を示す番号をまるで囲んでください（＊10段階評価）	実習での課題は実習目標を達成するために有効だった	学生とのコミュニケーションに戸惑うことが多かった（反転項目）

＊評価尺度について
　学生による評価項目　No.８については10段階評価
　１＝全く満足しなかった，10＝大いに満足した
　そのほかはすべて４段階評価
　１＝全くそう思わない，２＝あまりそう思わない，３＝ややそう思う，４＝大いにそう思う
受け入れ機関スタッフの評価項目 No７．８は得点を反転させて積算した

表２　学生による実習評価

	2000～2004年度	学習目標明確性	学習内容統合性	目標内容の学習	環境・受け入れ態勢	教員の指導・援助	他職種の指導	実習課題の適切性	平均	実習満足度
看護援助論Ⅳ	年度平均値	3.69	3.50	3.54	3.56	3.82	3.46	3.55	3.59	8.83
臨地実習Ａ	年度平均値	3.85	3.56	3.48	3.67	3.78	3.66	3.67	3.67	8.34
臨地実習Ｂ	年度平均値	3.63	3.62	3.36	3.47	3.77	3.56	3.48	3.56	8.15
臨地実習Ｃ・Ｄ	年度平均値	3.69	3.64	3.46	3.78	3.67	3.70	3.61	3.65	8.22
臨地実習Ｅ	年度平均値	3.76	3.66	3.56	3.52	3.83	3.68	3.68	3.67	8.45
臨地実習Ｆ	年度平均値	3.72	3.42	3.49	4.00	3.80	3.84	3.70	3.71	8.57
臨地実習Ｇ	年度平均値	3.02	3.30	3.28	3.64	2.44	3.51	2.92	3.16	7.44
総合実習	年度平均値	3.73	3.65	3.57	3.77	3.70	3.77	3.63	3.69	9.11

表３　教員による実習評価

	2000～2004年度	学習目標	学生の理解	内容の統合	内容の学習	指導・援助	環境・受け入れ態勢	他職種の指導・援助	課題	平均	実習満足度
看護援助論Ⅳ	年度平均値	4.00	3.96	4.00	3.52	3.48	3.48	3.00	3.52	3.62	3.59
臨地実習	年度平均値	3.39	3.25	3.10	3.25	3.14	3.09	2.77	2.86	3.11	3.39
総合実習	年度平均値	3.50	3.38	3.27	3.29	3.20	3.16	2.82	3.03	3.21	3.49

Ⅳ．2000年度～2004年度までの４年間の実習科目評価結果

１．学生による実習科目評価（表２，図１～３）

１）看護援助論Ⅳ（レベルⅠ実習）**(図１)**

実習満足度は非常に高く，年度を通して平均8.83であり，どの評価項目得点も年度による差はない。レーダーチャートはほぼ８角形を呈している。特に「教員の指導・援助」の評価得点が3.82と高く，「他職種による指導・援助」は3.46と低かった。**表５**に示した回収率は2000年度75.6%であったが，2004年度は38.0%と約半数で減少傾向にあった。

２）臨地実習（レベルⅡ実習）**(図２)**

臨地実習ＡからＦの実習満足度は年度平均8.15から8.57であり，どの年度もほぼ８角形を呈していたが，臨地実習Ｂ，Ｅは年度による差が見られた。評価項目別の得点では，臨地実習Ａ・Ｂ・Ｅ・Ｆは「教員の指導・援助」3.77～3.83，臨地実習Ａ・Ｅ・Ｆは「学習目標の明確性」3.76～3.85と高く，臨地実習Ｃ・Ｄ・Ｆでは「他職種からの指導・援助」3.70～3.84，「実習環境，受け入れ体制」3.78～4.0と高い得点であった。それに対し臨地実習Ｇの評価結果は，実習満足度は年度平均7.44と他の領域に比べ低く，全体的にも評価得点が低い結果であった。項目別では「教員の指導・援助」が2.44と低く，「実習環境，受け入れ体制」3.64，「他職種にいる指導・

表４　スタッフによる実習評価

	2000～2004年度	実習目標明確性	担当教員と話し合い	教員と協働	実習時間帯の考慮	学びが得られる実習内容	学びが得られる実習方法	学生の学内の準備	学生とのコミュニケーション	平均
看護援助論Ⅳ	年度平均値	3.16	2.98	2.82	3.08	2.98	2.98	2.37	2.23	2.83
臨地実習	年度平均値	3.07	2.86	2.60	3.13	2.97	2.86	2.60	2.37	2.81
総合実習	年度平均値	3.11	2.92	2.71	3.11	2.98	2.92	2.70	2.70	2.89

表５　学生の回収率の年度推移

	Ⅰレベル	Ⅱレベル						Ⅲレベル
	看護援助論Ⅳ	臨地実習Ａ	臨地実習Ｂ	臨地実習Ｃ・Ｄ	臨地実習Ｅ	臨地実習Ｆ	臨地実習Ｇ	総合実習
年度	回収数 (回収率) 受講者	回収数 (回収率) 受講者	回収数 (回収率) 受講者	回収数 (回収率) 受講者	回収数 (回収率) 受講者	回収数 (回収率) 受講者	回収数 (回収率) 受講者	回収数 (回収率) 受講者
2000	62 (75.6%) 82	42 (47.7%) 88	34 (38.6%) 88	45 (25.7%) 175	26 (29.5%) 88	28 (31.8%) 88		
2001	41 (46.6%) 88	34 (43.0%) 79	20 (25.6%) 78	39 (24.8%) 157	27 (34.6%) 78	33 (42.3%) 78	20 (23.3%) 86	21 (24.7%) 85
2002	45 (51.7%) 87	32 (37.6%) 85	29 (34.1%) 85	29 (34.1%) 85	33 (38.8%) 85	33 (38.8%) 85	18 (23.4%) 77	24 (31.2%) 77
2003	30 (33.3%) 90	34 (41.5%) 82	30 (36.6%) 82	26 (31.3%) 83	32 (39.0%) 82	36 (43.9%) 82	19 (23.8%) 80	31 (38.8%) 80
2004	35 (38.0%) 92	25 (26.9%) 93	27 (29.0%) 93	38 (40.9%) 93	33 (35.5%) 93	27 (29.0%) 93	9 (10.6%) 85	23 (27.4%) 84

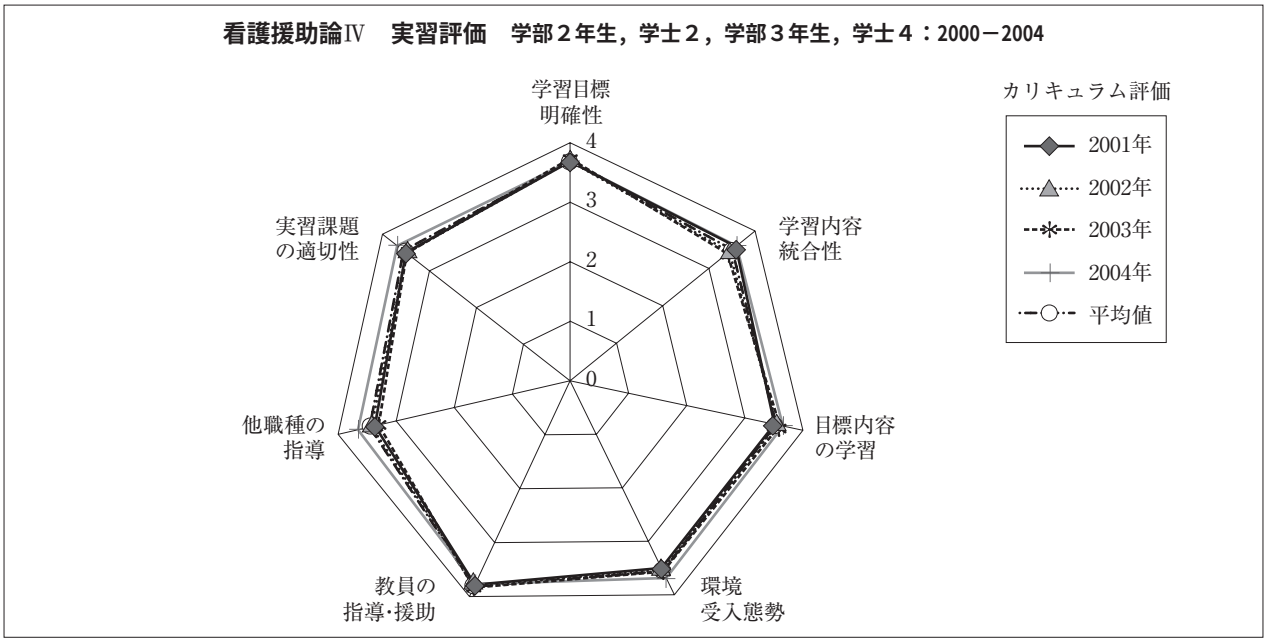

図１　学生によるレベルⅠ実習評価

援助」3.51と高かった。

回収率については，臨地実習ＡからＦは年度による差は見られず，最小25.6%から最大47.7%であったが，臨地実習Ｇについては，３年間２割弱にとどまり，2004年度の回収率は10.6%と低かった。

３）総合実習（レベルⅢ実習）**(図３)**

実習満足度は最も高く，年度平均9.11であった。各評価項目の得点も平均3.57から3.77となり，実施初年度はやや内側に位置しているが，各年度ともに安定した８角形を描いている。回収率は24.7%～38.8%で年度による差が１割程度見られた。

２．教員による実習科目評価（表３，図４）

１）看護援助論Ⅳ（レベルⅠ実習）

教員の実習科目満足度は，年度平均3.59と高かった。評価項目では，「学習目標の適切性」4.0，「学習内容の統合」4.0，「学生の理解」3.96と高い得点であった。それに対し，「他職種による指導・援助」は3.0と低い得点であった。**図４**で年度推移を見ると各年度により差が見られ，必ずしも８角形ではなく「学生の理解」「内容の学習」「課題の適切性」など学生の学習状況や「環境・受け入れ態勢」「教員の指導・援助」など実習指導体制に年度差が見られた。

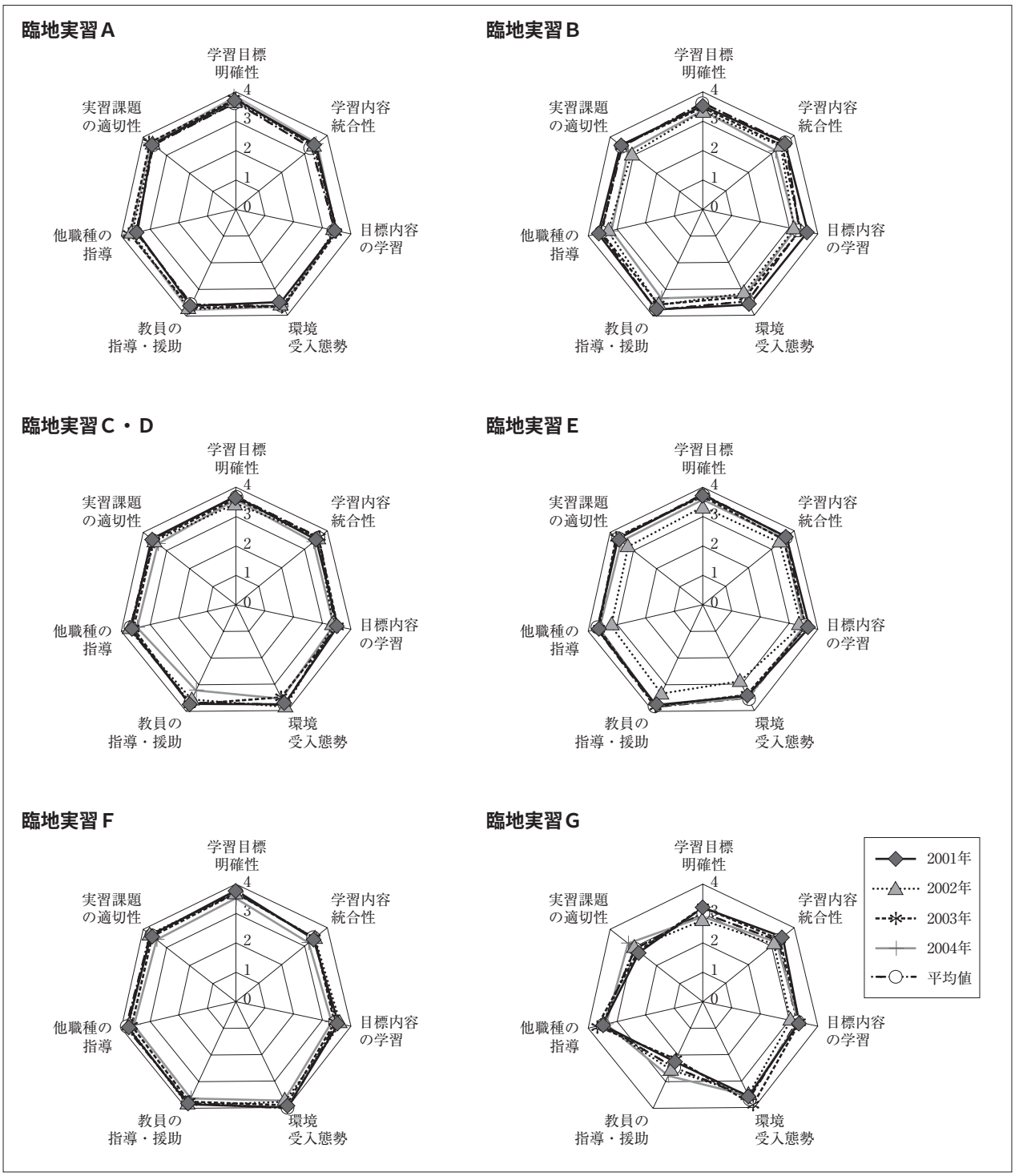

図2　学生による実習評価

2）臨地実習（レベルⅡ実習）

臨地実習A～Gの全領域を平均して算出した。その結果，実習科目満足度は年度平均3.39と高く，評価項目別の得点は，項目別では「他職種の指導・援助」2.77，「課題の適切性」2.86，「実習環境・受け入れ体制」3.09と低く，「学習目標の明確性」3.39，「学生の理解」3.25，「内容の学習」3.25と高かった。**図4**により年度推移を見ると年度により得点差が見られる。特に2004年度は「内容の統合」「実習環境・受け入れ態勢」が低い結果となっていた。

3）総合実習（レベルⅢ実習）

実習科目満足度は，年度平均3.49と高い評価であった。評価項目別では，「学習目標の適切性」3.5，「学生の理解」3.38と高く，「他職種による指導・援助」2.82と低かった。**図4**で示した年度推移では，実施初年度の「教員の指導・援助」の得点が低く内側に位置していた。また，看護援助論Ⅳから総合実習へと実習レベルがⅠ～Ⅲへ進むにつれレーダーチャートは8角形を描き，年度差

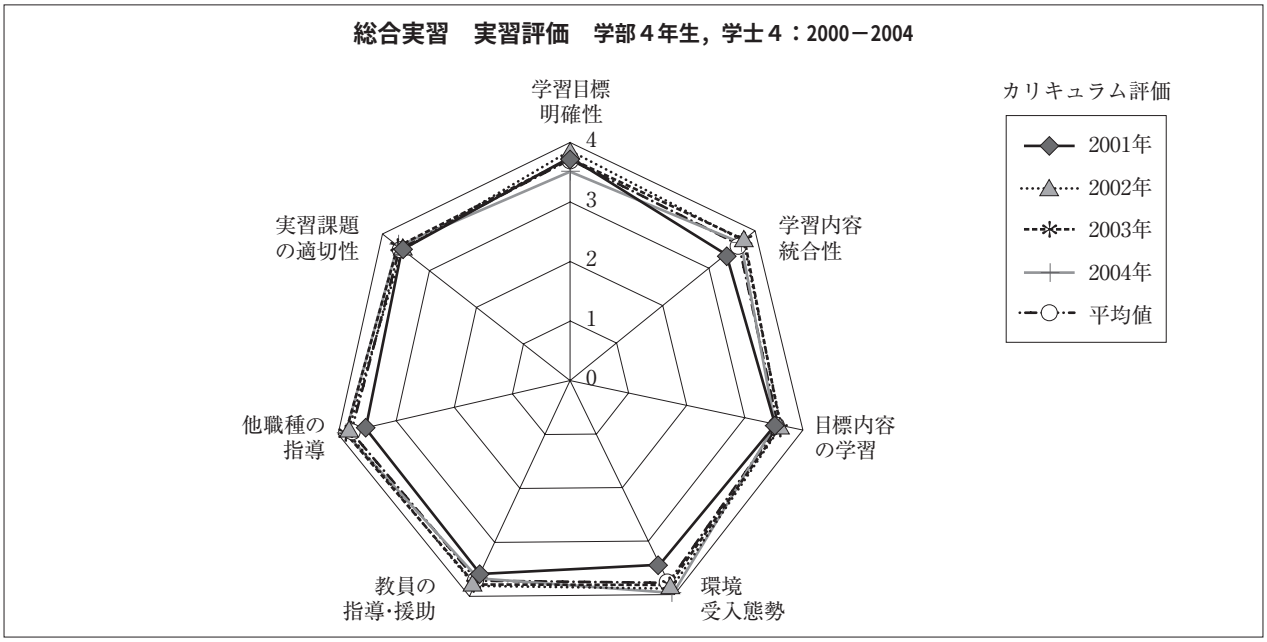

図３　学生によるレベルⅢ実習評価

が小さくなる傾向があった。

３．スタッフによる実習科目評価（表４，図５）

看護援助論Ⅳ・臨地実習・総合実習での共通した結果として，評価得点の平均は2.8点台であった。評価項目別では「実習目標の明確性」「実習時間帯の考慮」が３点台，「学びが得られる実習内容」「学びが得られる実習方法」が2.9点台，「担当教員との話し合い」は2.86～2.98と得点が高かった。それに対し「学生の学内の準備」が2.37～2.70と低い評価であった。

また，実習のレベルでの変化では「学生とのコミュニケーション」の項目が，実習レベルが上がるごとに評価が高くなっていた。実習レベルⅠの看護援助論Ⅳでは「担当教員との話し合い」2.98，「教員との協働」2.82の得点がともに高い結果であった。**図５**で年度推移を見ると各実習レベルとも年度差は見られなかった。しかし，実習レベルがⅠ～Ⅲへと進むにつれ８角形を描き評価項目による差が少なくなっていた。

Ⅳ．考　察

以上の実習科目評価の結果から，下記のような課題が明らかになった。

１．実習科目の満足度は高く，臨床との協働した指導体制の基盤づくり維持と学生の実習準備学習の強化が今後も重要である

臨床スタッフとの協働により実習科目は，学生，教員ともに高い満足度評価を得，年度による教員評価の差異があるものの，おおむね良好な評価結果であった。特に実習受け入れ機関のスタッフによる評価では，「学生の学内準備状態」については評価が低い一方で，すべての実習で「学生の学びを得られる実習内容や方法」として支持しており，実習方法に関するスタッフの理解と協働が実現しているといえる。この背景には，実習受け入れ機関と教員が実習までに「担当教員と話し合い」がもたれていることや，「実習時間帯の考慮」が高かったことからも双方の努力あっての結果であると解釈できる。

このような実習受け入れがあってこそ，学生は「教員による指導・援助」「他職種からの指導・援助」に対し高い評価を示し，教員は「実習環境・受け入れ体制」に対して高い評価している結果が現れていると思われる。臨地実習を行う際の実習指導の重要性と実習環境を整える上での臨床での教育的理解と協力の必要性が示唆されたと考える。

以上のことから，現行のカリキュラムにおける実習科目は，実習内容や実習実施における学習環境に関する基盤整備はおおむね良好と考えられる。しかし，評価の低かった「学生の学内の準備」を行うため，実習に関連する専門科目において，演習方法や学習内容の教育内容の見直しとともに実習との関連を踏まえた科目配置の検討が必要と考える。

２．実習レベルの積み重ねにより，実習レベルⅢの総合実習は統合実習として意義があることと，学生のコミュニケーション能力の成長という学習効果がみられた

今回の評価結果では，レーダーチャートで明らかなように，実習レベルⅢは学生，教員，受け入れ機関のスタッフ３者の評価が最もバランスよく，評価項目も得点が高く，目標達成されていた。また総合実習は，学生の満足

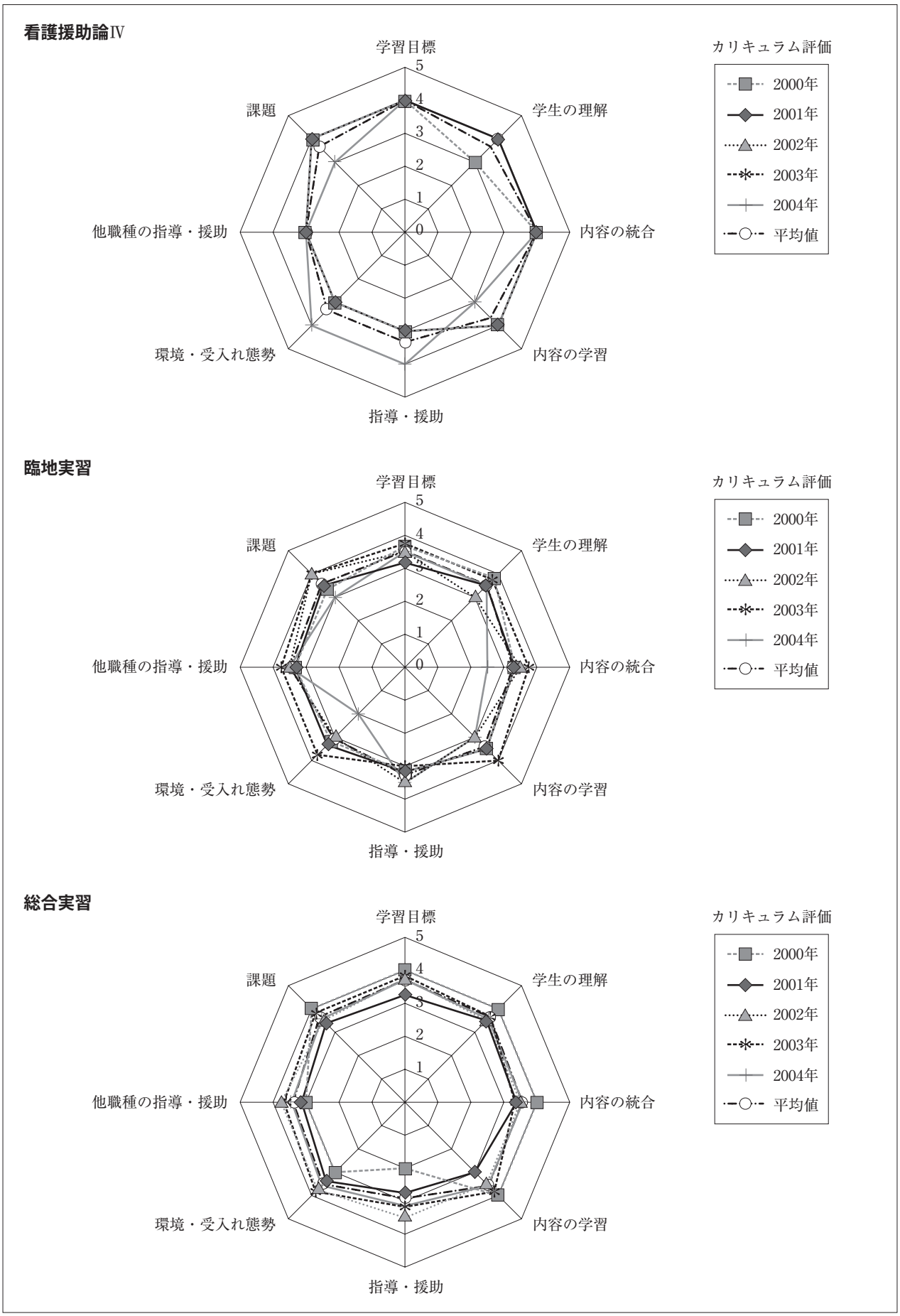

図４　教員による実習評価

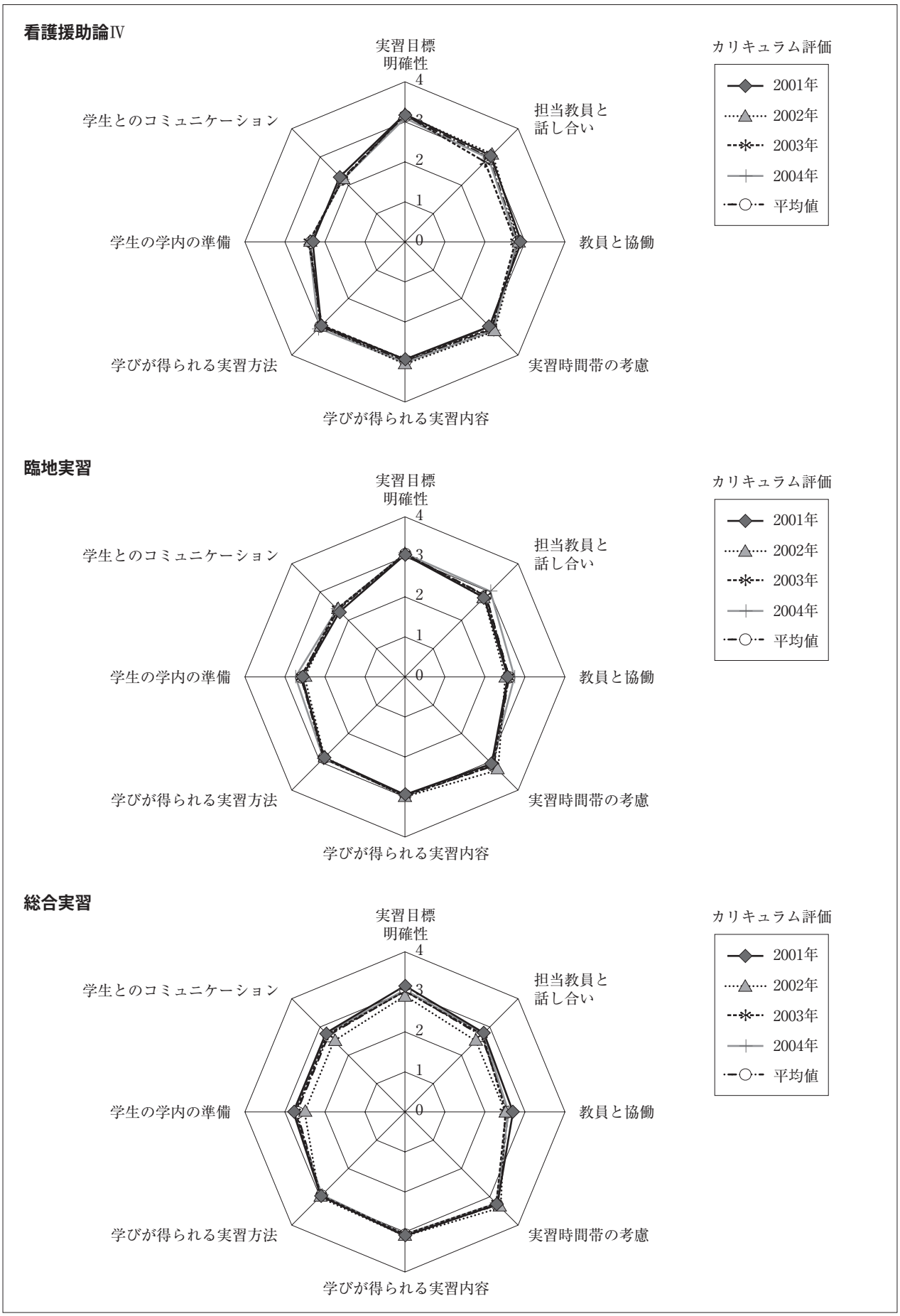

図５　受け入れ実習機関スタッフからの実習評価

度が9.11と最も高く，４年次における統合した実習科目として位置づけたカリキュラム上の意義が示されたものと考える。

さらに，実習受け入れ機関のスタッフによる評価から，「学生とのコミュニケーション」は実習レベルが上がるにつれ評価得点が高くなっていた。この結果は学生が実習の場でスタッフとのコミュニケーションを行いながら，自分の実習計画に基づいた看護実習を展開していることがうかがえ，実習レベルの積み重ねによる学習効果として成果の一つではないかと考える。

３．回収率を上げるような評価方法の改善が望まれる

評価結果の回収率は学生のみの結果であるが，全体的に低く，総じて３割強の回収率であった。これは実習が遠隔地に及ぶこと，評価時期や回収方法がまったく学生に任されていることも一因ではあるが，現段階では，カリキュラム評価結果を学生に公表していないことが大きな要因と考える。カリキュラム評価の必要性と意識啓発のためには，評価を行う学生，教員，実習受け入れ機関スタッフがその評価結果を知ることと、どのように活かされ活用されるのかを知る必要があり，評価結果の公表に関して検討する必要があると考える。

４．臨地実習Ｇの実施時期変更の根拠が明らかになり，今後の評価結果をもとに実習科目配置変更の妥当性を検討する必要がある

今回の実習評価では，特に臨地実習Ａ～ＦとＧの領域間での差が明らかになり，臨地実習Ｇの実施時期の改定の根拠が示されたと考える。現行のカリキュラムでは臨地実習Ｇは，Ⅱレベルの実習でありながら，４年次に実施していること，また総合実習と併行して実施していること，一部の学生はレベル実習が逆行しⅢレベルを先に実施する学生があることなどカリキュラム上の不整合がある。また臨地実習Ｇは地域実習の特性から，実習依頼機関が都内に点在し，保健所三十数ヵ所，訪問看護ステーション四十数ヵ所を教員４名で３週間の実習指導に当たっている。しかも総合実習との重なりもあることから，教員の指導体制が十分に取られないなど，学生にとっての学習環境がⅡレベル実習として他領域と異なる。また実習受け入れ機関が地域によって多様であり，均一な実習内容が実施できないなど，複数の要因が関連しており，単純に他領域と比較できないこともある。

しかしながら，今回の評価結果は，カリキュラム上の問題点が学生の評価から明らかになったと考えられる。今後，カリキュラム改正後の結果がどのようにカリキュラム評価に影響するかによって，実習科目の実施時期や配置，実習科目との連動などカリキュラム上の課題を検討する必要があろう。同時に，実習領域独自の実習方法や内容，指導体制などの実習運営上の課題を検討する必要がある。

Ⅴ．まとめ

以上，カリキュラム統括評価の一部として実習科目評価を報告した。今後も改正カリキュラムの効果を評価するために，通常の評価を行いながら，学生のヒアリングを継続し順次改善を加え，実習と専門科目との関連を検討していきたいと考える。そして，学生，教員，実習受け入れ機関が協働しながら，看護基礎教育として必要な看護実践能力の基盤を形成する実習のあり方を検討していきたいと考える。

引用文献

１）小山真理子，平林優子，南川雅子他．聖路加看護大学におけるカリキュラム評価．聖路加看護大学紀要．26，2000，123－132.
２）聖路加看護大学2000年度カリキュラム評価委員会：カリキュラム評価システムについての答申．(学内資料．未発表)